

アフリカ 歴史と未来と多様性の大陸

まずは正面の大陸全体の地図をご覧ください。アフリカの地図はたいいてい国境線の入ったものである。植民地時代の名残から直線で区切られた国境が多い。ここではそんなこと関係なく自然の地形を見てほしい。砂漠から緑豊かな地域まで、平坦な土地から高く険しい山脈や高原まで多様な地形がみとれる。

アフリカは人類にとって歴史が古い。360 万年前の最初の人類アファール猿人はアフリカで見つかっている。アフリカ大陸に現れた現生人類が 6 万年前に世界各地に分かれて移動していった。この「グレートジャーニー」という旅は1万5千前に太平洋の島々にも及び、今日に至っている。多様な文明を築きながら人類が大移住していったその逞しさに驚かされる。6月9日まで上野の国立科学博物館で特別展が開催されている。

アフリカにまつわる話としてお勧めはサンテクジュペリの『星の王子さま』だ。ある飛行士が北部アフリカのサハラ砂漠で不時着をしたときに小惑星から来た王子さまと出会った。王子さまの話にはアフリカ特産のバオバブの木が生えた星が出てくる。

マラウイは南部アフリカのそれほど大きくない国だ。東に湖を抱える高原の国だ。しかし日本との関係は特別だ。青年海外協力隊が 100 人近くが派遣中である。累計の実績でも世界一、日本の協力隊員が派遣された国だ。分野も医療・看護・教育など多彩だ。マラウイでは今「一村一品運動」を展開しながら農村開発を図っている。先方大臣から頂いた写真集の表紙は未来を想像させる力強いものだ。この国に興味のある方は『マラウイを知るための 45 章【第 2 版】』が便利だ。

もう一つ注目の国はボツワナ。南アフリカ共和国の北に位置する。乾燥地帯だがダイヤモンドについてはロシアに次いで世界第二の生産国だ。世界のダイヤモンド市場を支配するデ・ビヤス社も今やボツワナと切っても切れない関係だ。人口 200 万人弱の小さな国だが、目覚ましい経済成長を遂げ、その豊かさを教育などに重点配分し堅実に発展している国だ。北にあるアンゴラで降った多量の雨水は、この国にも流れ込みカラハリ砂漠の北にオカバンゴの大湿地 (Okavango Delta) をつくっている。アフリカゾウを始め野生生物の宝庫となっている。この国に興味の

ある方は『ボツワナを知るための 52 章』が便利だ。

ダイヤモンドといえばブラッド・ダイヤモンドといわれるように多くの国では貧しさと紛争の種になっている。デカプリオ主演の映画『ブラッド・ダイヤモンド』(2006 年)の舞台は西アフリカのシエラレオネである。この映画のもとになったといわれる本が、Greg Campbell 著『Blood Diamonds: Tracing the Deadly Path of the World's Most Precious Stones』である。ダイヤモンド取引に広がる巨悪と厳しい現実を描いている。

シエラレオネは貧しさと紛争に苦しむ国の一つだ。山本利晴『世界で一番命の短い国 シエラレオネの国境なき医師団』は厳しい医療事情の中で奮闘した日本人医師の体験記である。

野生の王国としてもう一つ見逃せないのが、セレンゲティ国立公園。タンザニアにある UNESCO 世界遺産 (自然遺産) である。関東平野ほど広い区域の自然保護を図っている。そのタンザニアの東部、インド洋に臨むザンジバル島。かつてイスラームのスルタンが治めていた島だった。ここを出発してアフリカ大陸を気球に乗って 5 週間かけて横断した物語がある。ジュールベルヌ『気球に乗って五週間』である。現地人の襲撃あり大陸を空から探検する物語である。到着は西アフリカのマリ共和国でセネガルにほど近いところである。

セネガルはアフリカ大陸の最西端の国である。その大西洋に突き出た岬が「緑の岬」である。フランス語で Cap Vert といい、ポルトガル語で Cabo Verde (カーボベルデ) という。沖合の大西洋に浮かぶ島国がカーボベルデ共和国、かつてポルトガルの植民地だった。この国の音楽はモルナとよばれ、ポルトガル、西インド諸島、アフリカ、ブラジルの影響を受けた複合音楽。アフリカの多様性を象徴している。

6月1日～3日に TICAD V (第五回アフリカ開発会議) が横浜市で開催される。1993 年に始まり 5 年ごとの開催である。日本にアフリカの元首や政府首脳が大挙して集う大きな国際会議である。今回の全体のテーマは「躍動するアフリカと手を携えて-質の高い成長を目指して-」だ。経済成長の目覚ましいアフリカの取り組みを支援していこうとするものである。
(総合政策学部 知原 信良)